

ないたつぎのひ

「ふう」

ああ、こんなピツカピツカの朝なののため息なんて、ありえない。

しょうがないなあ。きのうは一日中、子犬の飼い主探して歩き回ってたし、あのムチャ強いヤツとの戦いもあったし。

でも、ため息の理由はそれじゃない。うん。わかつてる、自分でも。

またひとつ、ため息ついてたら、背中の方でだれか深呼吸してた。見えたんじゃない、聞こえたんだ。深呼吸が。

「おはよ、なきよ」

あたしが振り向くと、耳元で声があるのがいっしょだった。明るい、いつものほのかの声。

でも、すぐにわきを向いちゃって、あたしの方

見てくれない。しょうがないから回り込んで下からのぞきこんで、え!?

「なに、その目!？」

まぶたが大きくふくらんでる。そう、まるでアライグマみたいに。

「ふふ。ちよつと、泣いちゃって、ね」

ちよつと? 『これが』ちよつと』!?

不思議ね、はじめて知ったわ。涙が出なくなっても、人間は泣けるんだなあ、って」

そう言いながら、ほのかがにつこり微笑んだ、んだと、思う。はれちゃった目を、すこしつむって。口元を、ちよつとだけしめて。

その顔を見ながら、あたしはしばらく声も出なかった。けど、だけど よおし。決めたっ!!

「おっはよー!」

教室に入った瞬間、なぎさが元気に言った。

「あ、なぎさ。おはよ。ほのかちゃんも　って、ええっ!？」

ラクロス部のふたりがわたし達を見て、ぼかーんとくち開けてるわ。あゝあ。なぎさに言われて、公園で顔洗ってから来たのに、だめだったみたい。

「ど、どうしたの? ほの　」

まあ、仕方がないわね。わかってたことだし。さ、ほのか、ちゃんと笑つものよ。

「別に　」

言いかけたところで、目の前になぎさが出てきた。

「あはは。やつぱ、バレル?」

え?

「いや、きのうロゲンカしちゃってさあ。あたしも気が短いから、つい、その　ね?」

え? え? なぎさったら、なに言ってるの?!

「ちよつとちよつとちよつと! ね? じゃないでしょーが! 顔にキズが残ったらどーすんのよ!!」

教室のあちこちで、一斉に『ひっどーい』って声。

ああ、いったいどうするつもりよあ。

「ちゃんと謝ったわよ。それにこうやって、朝もついてきてるんだし」

「とーぜんでしょ。なぎさと違って、ほのかちゃんも顔でも売れるんだから」

「ちよつと、それどーゆー意味よ?」

ああ、クラスみんなが、わたしたちの周りに集まってきちゃったわ。いろいろ言われるのは覚悟してたけど、これは、ちよつと

「はい、はいはい。みんな、席について」

教室の前から、先生の声が聞こえてきて、みんなびつくりしてた。みんなしてわたしたち見てたから、だれも気が付かなかったのね。ガタガタ音たてながら席について、日直の号令がかかって。いすに座りなおしたら、先生がわたしを見てる。

「あら? 雪城さん、その目　」

そっか。先生に説明する、っていうのは忘れてた

わ。ええと

「センセー！ すみません。それ、あたしのせいで
すっ！」

わたしが迷ってたら、なぎさが右手上げながら、思
いっきり立ち上がって言った。

「あ、そうなの。美墨さん、女の子の顔なんですす
らね。もうちよつと注意してよ？」

「はあい。以後、気をつけまーす」

あつけにとられてたわたしの机には、いつの間に
か、ちつちやなメモがいつぱい届いてる。『もう消え
てきてるから』とか『護身術教えたげようか？』と
か すっかり、被害者になつちやつたみたい。

なぎさが、親切で嫌われ役やつてるのはわかるわ。
感謝しなくちゃいけないんだな、っていうのも、頭
ではわかる。でも、わたしは別によかったのに。泣
きはらした目でみんなに会つても。それは、自分が
心の底から泣きつくした証拠だから

「損な性格ね。なぎさって」

しばらくの間、それを言ったのがわたしだなんて、
気がつかなかった。

「起立！ 礼！」

ふう。 やつと午前の授業が終わったわ。

来た先生みんなわたしの顔チラッと見てたけど、だ
れも何も言わないな。よし美先生が理由話してくれ
たのかしら？

それはいいけれど なぎさが言った口げんかの
はなし、結構遠くまで伝わつちやつてるみたい。な
んだか、休み時間に教室のまえ通る子、みんなわた
しとなぎさ見てヒソヒソやつてるわ。

なぎさは気がついてないのか、休み時間のたびに
わたしのところ来るし はあ。お昼ごはんは、外で
食べた方がいいかも。

そう思いながらカバンを開けて、わたしはそのま

ま固まった。そっか、そうだったわ。

「ねえ、ほのか。お昼、いつしょしょ？」

固まってるわたしの背中から、なぎさが声かけてきた。にこにこしながら、お弁当かかえて。

「え、ええと　実はね、お弁当、作り忘れちゃって」

ちらつと窓際の方見たら、いつもなぎさと食べてるふたりがこつち見てるわ。両手にぎって、じいつと見てる　??

「だと思った。ほら、パン買ってあるよ。あ、お弁当がいいなら、あたしがパン食べるけど？」

すっごい早口に、わたしは、

「え？　あー、じゃ、パン　」

つて応えるのが精一杯。

ああ、受け取っちゃったら、いつしょに食べないわけにいかないわよね。またうわさをねちゃうなあ、そうだ。

「あ、でもごめんね。きょうは屋上行って食べようかな、って　」

「だったら、あたしも行くよ」

ええっ!?

鉄の扉の向こうは、『夏』そのもの。

「ううわ。見事なくらい、だあれもないねえ」

「この季節、お昼は暑いもの。外で食べる人は、みんな木陰に入っちゃうわよ」

わたしは、聞こえないようにため息ついた。そう。

だから『屋上で』って言えば、あきらめてくれると思っただけ

「ま、たまには暑いとこもいいでしょ。じゃ、よいしょとあー！」

なぎさの背中から、大きな棒みたいのが出てきた。

「なに、それ？」

「やつ、と笑いながら広げたら　ビーチパラソルう？」

「ふふくん。ラクロス部、夏の備品そのいち。練習のとき、テント代わりに使うんだ　」

ああ、負けたわ。なぎさには。

「ほら、シートもひいたから。さ、食べよ食べよ」
座って、パンを取り出したところで、あれ？と
思った。このパン、購買で売ってるのと違うわ。よく
見ると、袋にはコンビ二の名前が書いてある。
そっか。わたしが顔を洗ってるとき、近所のコンビ
二で買ったのね。

「ほんとに、損な性格なんだから。なぎさって」
言ってしまったからあわてて口押さえたけど、な
ぎさは聞こえてないみたいだった。

お昼を食べ終わってから、わたしは片付けてるな
ぎさを置いて屋上から降りていった。

そのまま、ひとりになれるある場所に行って、場
所を確保。ふう。片付けもしないなんてお行儀悪い
けど、ちょっと考えなくちゃ。

よくわからないけど、なぎさはわたしを追いかけ
てるみたいだわ。うん、これは確実。

朝、変なこと言っちゃったからかしら。いまは、ひ
とりになりたいたいんだけどな。ここでならひとりだけ
ど、あまり長い時間はいられないし

なぎさの気持ち、わからないわけじゃない。友だ
ちが大泣きしちゃってたら、だれだって心配になる
もの。でも、だからっていつまでも心配されたら、わ
たしは何もできなくなっちゃうじゃない？

他の人に気を遣わないでいられる場所も、必要な
のよ。なぎさ

遠くの方で、ボールの弾む音がする。ちよつとだ
けど歓声も。サッカーかな？

でも、もう、そこにあの子はいないんだわ

いけない。これ以上考えてたら、午後の授業受け
られなくなっちゃう。わたしは手早く処理して、そ
の場所を出て行った。

「あ、ほのか。えーと」
 出た瞬間に、なぎさの顔とはちあわせ。赤くなりながら、頭かいてる。ちよつと、まさか !!
 「もあー！トイレの出待ちなんてしないでよあつ!!」

ほんとに、もつ。なぎさの口癖じゃないけど、『ぁりえな〜い』だわ。本気で、とことん追いかけるつもりね。だったら

授業が終わると、わたしはカバン持って理科室に向かった。今日は実験でみんな集まっているし、なぎさだって部活があるから別々。あとは、早めに終わって帰れば、って、わたしもなに考えてるんだろ？別に、逃げたいわけじゃないのに

理科室の前まで来たら、中が騒がしいわ。いやな予感を振り払いながら扉を開けたら、あ、あれ？珍しいな。ユリコが、あわててるわ??

「あ、よかつたあ。ほのか、なんとかしてよあ」
 ま、まさか ?
 「来た来た。ね、何すればいい？力仕事ならけつこうできるよ」

ユリコの指の先には、プラスチック抱えたなぎさが立っていた。いろんな薬品入りで、混ぜたら危ないのに。
 「ほら、ほのか。ちゃんと指示して、って」
 い、いつくらなぎさでも、いいえ！なぎさだから!!

「いいかげんにしなさい!!」
 思ったより大きな声になって、みんなしーんとしちゃった。けど、止まらないわ。
 「わたし一人だったらまだいいわ。でも、今は化学部のみんなが迷惑してるの！危険なのよ!!」なぎさには、それがわからないの?!
 みんなは口を開かない。わたしがじつ、となぎさの顔をにらんでたら、プラスチックがテーブルに置かれる小さな音が響いた。

「あ、あーはははは。そ、そうだね。ごめん。ごめんね」

すうつ、つととびら閉めて、なぎさが出て行った。けど、わたしはまだしばらくにらみつけてた。

結局、実験の間はだれもわたしに話しかけてこなかったな。最後までみんな遠慮きみで。片付けはわたしがやる、って言ったたら、逃げるみたいになくなってしまった。

もつ。きようはなぎさに振り回されっぱなし。だいたい、朝のなぎさが悪いのよ。あんなウソ、相談なしでやろうとするんだもの。自分が犠牲になればどうにでもなる、なんて、こっちが迷惑

そこまで考えたとき、目の前が暗くなった。

『自分が犠牲になれば』それは、いま一番考えたくない言葉だったから。

背中に氷が入ったみたいだった。顔が青くなるのが、自分でわかる。そうだ、なぎさも、それができる人なんだった。それじゃ、今度は！?

「ねえ、ほのかちゃん」

テーブルからばっ、と起き上がったわたしは、多分すごい顔してたんだと思うわ。理科室の扉のところにいたふたり、びっくりした顔で見えていたから。

「やつぱり、怒ってるんだ」

ラクロス部のふたり——莉奈ちゃんと志穂ちゃんが、顔見合わせる。あわてて笑顔にもどしたけど、まだ心配そうな顔だわ。

「なぎさのことだけど、あんま怒らないでやってくれる？」

本当に、心配そうな顔 友だちの顔、だわ。

「なぎささ、あたしたちに言ったのよ。『きょう一日、ほのかにへばりつく』って」

「そうそうそう。ウザがられてもいい。一人になんて、絶対させるもんか！」って言ってた」

うん、そう。きつとそう思ってるんだろう、ってわかってた。けど」

「うんうん。だいたい練習試合も近いのに、部活休んじやったでしょ？先輩になんて言ったと思う？」
え？お休み？そんなの、聞いてないわ。だって、なぎさはエースでしょ？そんな無責任なことして

「あ。志穂、それ」
「絶対言うな、でしょ？いゝもん、あたしが怒られるから。」

ね、ほのかちゃん。なぎさってばさ、理由きかれよう言っただよ。』試合はとつても大事です。でも、親友には代えられません』って

あ
自分の顔が熱くなるのがわかった。わたし、なんて恥ずかしいこと考えてたんだろう——なぎさは犠牲になんかなくなっただんじやない。戦ってるんだわ。

みんなの好奇の視線と。お昼のパンと。ラクロス

部の先輩と みんなみんな、わたしのために。

「なにがあつたか知らないし、なぎさが言うまでは訊かないよ。けど、信じてあげて。なぎさは、絶対に信用できる友だちだから」

うん。今度ははつきりうなずいた。そうよ、なぎさは、なぎさなら、絶対に信じていいんだ

「ほのかちゃん。ちよつとだけ、小突かせてもらつていい？」

え？

わたしが顔を上げたら、ふたりとも苦笑いしてる。

そのまま、わたしのおでこが二回つつかれた。

「につこにこしちゃつてえ。ちよつとつらやましいんだぞ。こらー！」

「はあ」

屋上の手すりによっかかりながら、ため息がまた

こぼれた。もう、ここへ来てから何回目か忘れちゃったよ。

でも、そんなことどうでもいいんだ。それより

「ほのか、怒らせちゃった」

まったく、あたしってば、成長しないなあ。

「メボ」

あれ？

「メッブル、起きてたんだ」

ポシエットから半分飛び出したメッブルが、あたしを見るなり首を振った。

「なぎさは、ばかメボ」

「わかってるよ」

今日ばつかは言い返せないよ。ほんと、ばかやってるもん。

「みんなに嫌われてさ、ほのかにまでうつとおしがられてさ。ほんとに、ばかメボ。この世で一番のばかメボ」

「ぼんぼん言わないでよ。本当に、わかってるんだ

から」

そばで見てたら、よっぽどばかに見えるんだろ？
な。はあ、しょうがないか。

「けど」

ズズッ、って音がした。鼻すすってるみたい。思わず目を開いて下を見たら、

「ぼくは、ばかななぎさと一緒にいられることを、ここから誇りに思うメボっ！」

メッブルが、泣いてた。あたしのための、あたしのためだけの涙。

「メッブル」

でも、ちがう。

「ミッブルに、そんなこと言わないでよ？」

「わかってるメボ。だいじょうぶ。今はダメでも、落ち着いたらきつと、わかってくれるメボ」

ちがうよ。メッブル。

「わかってくれなくていいよ。別に」

「なぎさは勇者メボ。ひよっとしたら、ぼくより勇

「者かもしれないメボ」

「勇者？ 勇者って、勇気のある人」

「つめたっ！ なぎさ、飲み物をほくにこぼすなつて、何度も言つて……!?」

メップルの声が、遠くから聞こえる。はっとして下を見たけど、目の前がゆらゆらゆれて、まともに見えないよ。

「メップル、ちがう。勇者なんかじゃないよ。あたしに、勇気なんかないんだから！」

「メボ？」

メップルの顔、まだ見えない。でも、涙をふく気にならない。

「おかげでわかったよ。あたしに、ほのかの悲しみなんか、ホントはわからないんだ、つて」

あたしは、手すりの方に向きなおつた。少し赤みがかつてきた雲が、ぼんやり見えてる。

「でもね。わかりたい。そばにいてさ、ほんのちよつとでいいから、一緒にわかりたいんだ。これは

ただの、わがままでよ」

右手で手すりを握つて、動かしてみた。動か

ないや。あたし、なにやつてんだろ。

「メップルは、ミップルが泣いてたら心配メボ。そばにいたいメボ。いろんなこと知りたいメボ。

「どこがちがうメボ？」

ガシャン!!

手すりからすごい音がしてから、手が熱く感じられるまで、ちよつと時間がかかった。

「あのとさき あのとさあたしは、ほのかを押さえ込んだよ!?!」

痛く、なかつた。

「キリヤくん止めに行こうとしたほのかを、思い切りしがみついてさ！」

ガシャン!!

こぶしの下からちよつとだけ、赤いものが流れて

る 痛くない。痛くなんか、ない！

「そのあたしに、ほのかの気持ちがわかるなんて
ほのかのそばにいたいなんて お笑いなのよ、そ
もそもー。」

ああ、目の前が曇っていくよ。痛くなんかない。ほ
のかの痛みは、こんなもんじゃない

「いいかげんにするメポ!!」

こぶしを振り上げた瞬間、メッブルの音が、カミ
ナリみたいにひびいた。大きな声じゃなかったけど、
体がびくつとして。

「なぎさがほのか押さえなかったら、キリヤを止め
てたとも思ってるメポ? 違うメポ!

ほのかは、ぼくたちとキリヤのどっちもとれずに、
迷ったはずメポ。迷った自分が嫌いになってしまっ
たはずメポ!」

曇った視界の先に、黄色いのが見えた。元の姿の
メッブルが、両手を広げながらあたしをじつと見つ
めてる。

「なぎさが夢中ではがみついたから、ほのかも夢中で
キリヤを止めようと思えたんだメポ。なぎさは、な
ぎさは 十分にほのかのそばにいる資格があるメ
ポ!!」

目の前のメッブルを抱きしめたら、とたんにこぶ
しが痛くなってきた。

「メッブル ありがとう」

もいちどぎゅつと抱きしめようとした腕が、自分
抱いてた。あれれ?」

「相手はやっぱりミッブルがいいメポ」

「こんのお! せっかくの感謝の気持ちをつ
!

「それより、なぎさにはやることがあるメポ」

妙に楽しそうな言い方で、あたしの後ろを指さし
てから、メッブルはポシエットの中に入ってった。な
によ、いったい??

振り返ったあたしの前には、ほのかが立ってた

「ほ、ほ、ほのかっ!？」

莉奈ちゃんに教えられて屋上に上がったわたしの前で、なぎさがうろたえてた。

「ええと、あのー」

「ま、まさか全部聞いてたとか？ ああ、ありえないうっ!!」

聞いてたって なんのことだろう？ 全身真っ赤になっちゃって、わたしの声も聞こえてないみたい。しかたないわね。

「なぎさっ!!」

「は、はいっ……」

ああ、やっと落ち着いてくれたわ。それじゃ。

「なぎさ、あのーごめんなさい」

わたしが頭を下げる間、なぎさはなにも言わなかった。けど、頭を上げたたん、

「え？」

ってひと言。そっか、知らないと思ってるんだっ
たわ。

「練習、休ませちゃったんでしょーごめんなさい」

なぎさはしばらく訳がわからないって顔してたけど、いきなりはっとして、

「なんでほのかが っ、志穂だな。あんのおしゃべりいー!」

「そうじゃないでしょ!？」

ああ、思わず大声になっちゃったわ。いけない。ケンカしてきたわけじゃないんだから。

「そんなに、ずっと見てなくても大丈夫よ。まだ悲しいときもあるけど 忘れられないし、忘れちゃいけないと思うけど でも、大丈夫だから」

そう言いながら、わたしは笑った。きっと、今日始めて、本当に笑ったと思う。

これなら、わかるわよね。なぎさ？

「そっか。でも、さ。できたら、泣くときはそばに
いさせてよ。何の役にも立てないけど、近くにいた

い ダメかな?」

うん。わたしもわかった。今日はじめて聞く、なぎさのホントの気持ち。

でも、泣き顔を見られるのって、やっぱり恥ずかしいのよね。うーん

その夜。メッブルに晩ご飯食べさせて、ベッドに横になってたら、電話が鳴った。

『もしもし?』

取ってすぐ聞こえてきたのは、やっぱりほのかの声。家電の子機、念のために持って来といてよかった。

「あ、ほのか? なに?」

『あの あのね』

声が、ちよつと水っぱい。

「あ、すぐ行くつか?」

『ううん。このまま、しばらく電話つなげてて、

いい? もう、しゃべれないかもしれないけど』

ほのかの音が、だんだん小さくなってく。あたしは、すぐに声を明るくした。

『え? 料金かかっちゃうよ?』

『』

あ、ヤバ。またやつちゃった。

『冗談だって。いいよ、つきあうから』

『うん』

それだけ言って、だまっちゃった。静かな中に、ちよつとだけ水っぱい音が混ざってるだけの電話。聞こえるたびに、胸が痛くなる電話。

でも、ちゃんとつきあうよ。そばにいさせてくれるなら、いつまでも、ね♡

—おしまい—